

議事概要

令和7年度 第2回 新潟市地域と学校パートナーシップ事業運営協議会

日 時： 令和8年2月10日（火） 午後1時30分～2時30分

場 所： 東区プラザ 2階 講座室1

出席者： 新潟市地域と学校パートナーシップ事業運営協議会委員

足立委員、今井委員、片山委員、佐藤委員、塩田委員、高島委員、
事務局

生涯学習推進課長ほか 6名

傍聴者： なし

1 開会

2 生涯学習推進課長あいさつ

3 議事

（1）令和7年度の事業の成果と課題

【事務局】 案件概要説明

【片山委員】

1番の成果のグラフについてです。「事業が子どもたちの元気につながっているか」という項目について、とても高い数値が出ていてすばらしいという感想をもちました。その中で、やはり一番難しいのが「地域や社会をよくするために何をするべきか考える」という項目です。この数値が今後もっと高くなっていくといいと思っています。

今回の調査には小学校と中学校が含まれていますが、年齢層が高くなっていくと社会に向けた視点が広がるのか、年齢によってこの項目の数値的な変化はあるのでしょうか。分析が難しい部分であれば感覚的なものでも構いません。

【事務局】

参考資料14ページの35番をご覧ください。「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」という項目について、小学校では「当てはまる」が33%、「やや当てはまる」が41.9%でした。中学校では「当てはまる」が27.5%、「やや当てはまる」が38.9%となっており、年齢が上がるにつれてやや数値が下がるということが読み取れます。

この結果については当課だけで分析できるものではないと考えています。この項目は、地域と学校パートナーシップ事業でももちろん大切なところですが、総合的な学習の時間など学校の教育活動と深くかかわってくると考えます。そのため、学校支援課と情報共有しながら分析していく必要があると考えています。

【片山委員】

確かに1つの事業だけで評価できるものではないと思います。また同じ項目でも、中学生になると、社会とのつながりで自分が何をできるかと考えたときに、安易に「考えている」と言えない、この数値だけからはなかなか見取れないとも思います。このような具体の部分を教育委員会全体で考えていく必要があると感じました。

【佐藤委員】

今の話に関連して補足します。全国学力・学習状況調査の質問紙でも同じ質問があります。その結果を見ると平成25年以降、小学校6年生・中学校3年生ともに肯定的な回答は右肩上がりで増えています。

【足立委員長】

それは上の学年ほど考えているという意味でしょうか。

【佐藤委員】

そうではなく、経年変化でみると伸びているという意味です。例えば平成29年には小学生の肯定的回答は44.1%、中学生は36.8%でした。これが、全国状況調査の時、生活意識調査とは対象が異なるのですが、小学6年生では現在は83.1%、中学3年生では79%が肯定的な回答をしています。

【足立委員長】

教職大学院にきた社会科の小学校教員が、知識内容を児童に学ばせるのではなく、自分が社会とどう関わるかを考える授業にしたいと研究していました。そのような方向性が、各教科で求められていると実感しました。その時は小学3年生が対象だったので、社会と関わるということについて大人が介入しないと直接かかわることは難しいのかなと思いました。しかし、こどもたちも自覚しているから社会と安易にかかわれないだけで、実は深く考えている可能性もあると感じました。

【今井委員】

私のこどもが中学3年生なのですが、修学旅行のまとめ学習の発表を見たときに衝撃を受けました。東京に行った体験を発表して、最後に「ゴミの落ちていない街にしたい」というまとめになった内容が多かったのです。その飛躍が大きく、そこに至るまでの思考の過程が見えず、衝撃を受けました。

もしかすると「地域をよくする」というイメージがこどもたちの中でまだ広がっていないのかもしれません。だからこそ大人が地域の良さや価値を伝えていく必要があるのではないかと感じました。

こどもたちに何を手渡すことができるのかということを、地域や大人がもっと広げていくことが大切だと思います。

【足立委員長】

ありがとうございました。他にはいかがですか。

【今井委員】

学校運営協議会で出された成果と課題が地域と学校パートナーシップ事業の活動改善につながらずに終わってしまうということについて、なぜつなげていくことができなかったのかあるのであれば聞きたいです。

【事務局】

当課では、役割分担を決めることを大事に考えています。協議したことについて、改善のためにだれが何をするか、保護者、学校、地域それぞれの立場で取り組むことを具体的に話し合うと、実際の活動につながっていくと考えます。ただし、そのためには時間、開催回数など、各校の学校運営協議会の持ち方についても見直しが必要です。

【今井委員】

具体的に決まれば進むと感じます。

【足立委員長】

他にはいかがですか。

【高島委員】

公民館としては、コーディネーター研修に公民館職員も参加できるようになるという点は非常にありがたいと感じています。学校との連携を進めるうえで、コーディネーターとの関係づくりはとても重要ですので、そういう場で顔合わせをして、具体的に相談ができると連携事業を進められると思います。

【足立委員長】

ご意見をいただいたということでよろしいでしょうか。他にはいかがですか。

(2) 次年度に向けての意見交換

【足立委員長】

では、(2) 番の、次年度に向けての意見ですね。よろしくお願いします。

【事務局】 案件概要説明

【足立委員長】

ありがとうございました。委員の皆様からご意見はありませんか。

【塩田委員】

CSと地域と学校パートナーシップ事業の一体的推進のイメージ構築と質の向上ということで、地域ボランティアの声や活動の評価をコーディネーターが収集して協議会に伝えるという方策を各校に周知するというのははとてありがたいと感じました。研修会でも、情報交換の場があまり取れないという状況もあるので、情報交換の機会が増えることを期

待しています。

【佐藤委員】

社会教育施設との連携については、ぜひ強化していただきたいと思います。また、塩田委員がおっしゃったコーディネーターが声を収集して学校運営協議会に伝達するというあたりは、遠慮せずに生の声を挙げていただきたいと思います。

最近の調査では「将来の夢や目標がある」と答えるこどもが減り続けているという結果があります。一方で「自分には良いところがある」と感じているこどもは増えています。自分にはいいところがあると思えば、目標や夢を持つことにつながると思うのですが、そうはならないところが不思議です。コロナ禍で行事やふれあいが制限されたことも原因だと思います。さらに今、情報が氾濫していて自分が将来どこに向かうのかわからなくなっているのかもしれません。だから、地域の人や、身近な憧れとなる大人との出会い、話をきくことなど、こどもたちにとっての出会いの機会を増やしていくことが大切だと思います。

【今井委員】

地域の大人が学校で話をする取り組みもありますが、そうした生身の体験や出会いはこどもたちにとってとても大きいと思います。AIの発達によって一次体験が奪われると言いますが、そこに危機感をもたないといけないと思います。わたしたち大人の現体験をこどもに向けて話せる機会があると、こどもたちにとっても糧にできるのかなと考えます。

また、社会教育施設職員と学校職員が実際の活動について話し合う機会をもつのはとてもいいと思いました。。

【片山委員】

いろいろな職業の方に来ていただく学習は本当に価値があります。ただ、それを実現するにはコーディネーターの存在が不可欠です。先生だけではなかなか調整が難しいためです。持続可能な取組にしていくためにも、コーディネーターの複数配置制を今後も推進していただけるとありがたいです。

【足立委員長】

ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

(3) その他

【足立委員長】

議事の(3)番、その他について連絡事項はありますか。

【事務局】

- ②② 本日は多くの貴重なご意見をいただきありがとうございました。いろいろな大人とのかかわりが大切なんだということを改めて実感しました。いただいた意見を参考にしながら、次年度の取り組みを検討していきたいと思います。

今年度2回にわたりまして、次年度も運営協議会でご意見をいただきましてありがとうございました。次年度も、今年度同様に2回の開催を予定しております。

【足立委員長】

- ②③ それでは本日の議事は以上といたします。皆様ご協力ありがとうございました。

6 閉会

【配布資料】

- ・ 令和7年度第2回新潟市地域と学校パートナーシップ事業運営協議会資料